

特集 安倍政権を問う

—改憲と歴史認識

本田浩邦

プーシキンの戯曲『ボリス・ゴドウノフ』は16世紀末から17世紀初頭のロシアの動乱時代を描いた作品である。

ボリス・ゴドウノフは、イワン4世とその子フョードル1世の暴政に苦しむ貴族階級や一般民衆の後押しをうけ、皇太子ドミニトリーを殺害して王位につく。ボリスは家臣団の筆頭で評判の悪い人物であったが、貴族や民衆は、イワン4世やフョードル1世よりはまだどうと期待し、「ボリスが我らの帝王だ！　ボリス万歳！」（佐々木彰訳、岩波文庫）とその就任を祝福する。しかしほりスも政権を握るや圧政を敷き、貴族や反乱民衆に対する弾圧を繰り返し、人心をえるにはほど遠かった。するとまもなく、自分は殺されたといわれていたドミニトリーであると僭称するグリゴリーという男が現れた。貴族たちは、今度はこのグリゴリーを押し立てボリスの失脚を企てる。ボリスが急死したのち、彼の妻子は毒殺され、グリゴリーが新しい皇帝となった。即位式で、貴族たちは民衆に向かっていって、「なんでお前たちは黙っている？」

叫ぶんだ。ドミニトリー・イワノビッチ万歳！」しかし、毒殺の経緯を知ってか知らずか、民衆はその呼びかけに対して黙したままで、冷ややかであったという話である。

プーシキンはこの作品で帝政下の政争の不毛を描きだし、沈黙という民衆の消極的な憤激のなかにその政治システム全体を覆す原動力をみている。

当時の帝政のロシアと現在とでは比較にならないが、このストーリーは政権を取り替え

ても、取り替えててもいつこうによくならない。現在の閉塞状況と政治不信の蔓延と重なる。それは日本だけでなく、オバマのアメリカ、アラブの春の中東、世襲政治家ばかりのアジアなど世界のいたるところでそうである。むしろ、今や世界はボリス・ゴドウノフで満たされているとさえいえるほどである。

現在では、むしろ民主的な代表制があるにもかかわらず、状況を変革できないでいることが、政治的主体であるべき一般国民の無力感といらだちを募らせ、政治的アパシー（無関心）を生んでいる。政治学では、マジョリティーシステム（多数決で一人を選ぶ小選挙区制度のような方法）では中道右派政権ができやすいという研究がある。中間層を取り込む経済的・政治的・文化的資源を経済的支配勢力と結びついた右派が握る場合が多いからである。逆にプロポーショナルシステム（比例代表制度）では中道左派政権ができやすい。日本でも、本来ならば、昨年暮れの衆院選とこの夏の参院選で脱原発、護憲、消費税増税やTPPに反対する国会ができてしかるべきであった。しかし実際は、それとは真逆に、超国家主義的イデオロギーむき出しの政治家が大手を振って闊歩する状況ができてしまった。

さて、本号では、安倍政権の憲法と歴史認識の問題を掘り下げるべく多くの論者にご寄稿頂いた。ボリス・ゴドウノフ的世界を動かす契機をそれぞれの分野で見いだし、たぐり寄せたいというのが特集のねらいである。

（ほんだ・ひろくに：獨協大学、アメリカ経済論）